

鎮魂から創生へ
国生み神楽の初舞台。

古事記編纂 1300年 第四回 神々のふるさと

三大神話

神楽祭

伊弉諾神宮
出雲大社
高千穂神社

日程 9月23日(金) 16時00分開演 16時30分開演
場所 伊弉諾神宮特設舞台(雨天時は揮舞場にて)

http://izanagi-jin.jp

第四回 神楽祭

古事記や日本書紀などの古記録にある「神代」の伝承を「神話」と呼ぶようになったのは、明治時代以後のことです。全国各地には神代から伝わっている古伝承や逸話がたくさんありますが、淡路島を舞台とする「国生み神話」、高千穂への天尊降臨を伝える「日向神話」、素戔嗚尊の八岐大蛇退治などの「出雲神話」はその中核にあたる三大神話といえます。

国生み伝承の淡路島が誇る最古の神社「伊弉諾神宮」に、高千穂神社と出雲大社から神楽を招いて競演奉納する「神々のふるさと」三大神話「神楽祭」も第四回目を迎えることができました。

「三大神話神々のふるさと」
国生み神話の淡路島
天孫降臨を伝える高千穂
大蛇退治・国譲り伝承の出雲
この「神々のふるさと」をそれぞれと守ってきた三つの古社があり、それぞれの神話をもとに里人たちが舞い、神々に奉納される神楽が脈々と受け継がれてきた。

- 淡路 天女神楽と 国生み神楽の創生
- 高千穂 神楽
- 出雲 大土地神楽

淡路・出雲・高千穂
三大神話の郷に伝わる
神楽の競演
淡路 伊弉諾神宮 神楽祭

日本神話の残る「神々のふるさと」の神楽

国生み神話の淡路島	淡路神楽
出雲神話の出雲	大土地神楽
日向神話の高千穂	高千穂神楽

薄暗くなった淡路伊弉諾神宮の森の中、篝火に照らし出された舞台に
素朴なリズムをゆったり奏でる笛・太鼓 その音に合わせて神楽舞が浮び上る
心やすらぐ 気持ちの良い空間です どこかで体験した。
三内丸山遺跡の縄文祭りとおなじリズムだと・・・
日本人が縄文から受けついできたリズムとしぐさ
それが神楽舞にも受け継がれていると・・・



一度是非とも見たかった神話の里で夜を徹して舞われる夜神楽 神代神楽(岩戸神楽)

「岩戸隠れ」「大蛇退治」など日本神話に題材をとり、仮面をつけて舞う神楽で、日本神話の故郷 高千穂・出雲・石見・戸隠などで舞われるほか、日本各地に伝承されている。特にスサノウの八岐大蛇伝承を舞う演目「大蛇退治」は奥出雲の斐伊川流域のたたらと結びついているとの説もあり、その勇壮華麗な舞(石見神楽)は是非一度見に行こうと思ひながら、果たせずにいる。そんな神代神楽を奉納する祭「伊弉諾神宮 神楽祭」が数年前から毎年秋に、国生み神話伝承地 淡路島伊弉諾神宮で行われている。昨年見に行った息子が、今年は9月23日だとパンフレットを持ってきてくれ、車だと家から明石大橋を渡って30分ほど行けるので 楽しみに待ちかねて出掛けました。

今年は第4回目「第4回神々のふるさと 三大神話神楽祭」として、9月23日午後4時半から午後8時半まで、神話の里 出雲・高千穂から招かれた神楽に淡路神楽 それに淡路の新しい創作神楽の4つの神楽が伊弉諾神宮本殿前憎まれた特設舞台上で奉納され、約900人が鑑賞した。



出雲大土地神楽 「八千矛」



高千穂神楽 「細女の舞」



淡路神楽 「鉦の舞」



淡路創生 「国生み神楽」



「出雲の「大蛇退治」や高千穂の「天岩戸」

は是非見たいが、神楽とは古臭くて、退屈なものなのかもしれないなあ・・・」と思っていましたが、以外にも素朴な舞と素朴なリズム 心地よく、引き込まれてゆく。 淡路・出雲・高千穂と神楽が舞われる場所は変わっても みんな同じリズムですうっと体に入って来るのにびっくり。

これは 縄文・古代からずっと受けつがれてきた日本人のリズム。最近のTV・映画でみるデコレーションの行き届いたうそっぽさとは程遠い。単純素朴な仕草・舞が分かりやすくおもしろい。

これもまた、ついつい 引き込まれる心地よさの秘密かも。

また、淡路の「国生み神話」をテーマに創作された創生『国生み神楽』は神楽というより、ミュージカルリズムも全く異なっていて、なじめる淡路神楽になるには、これから磨かれねば・・・と

夕間に浮び上がった舞台上で 単純でゆったりしたリズムの太鼓・笛の音に合わせて神話の場面が大きく舞われる。実にわかりやすい神秘的な野外劇。ほっとす



る気持ちの良い空間 癒しのリズム 縄文から日本人の奥底にいつもあるリズムだと。

残念ながら「大蛇伝説」「国譲り」の場面は舞われませんでした、「岩戸開き」や「大国主命の出雲荒ぶる神退治」そして「イザナギ・イザナミの国生み」の場面など実に楽しい時間で、あっという間に夜八時半過ぎに終わりました。

神話や神楽の部分映像などは知っていましたが、夜神楽全体を楽しんだのははじめて。酔いしれた満足感いっぱい 来年も・・・と。

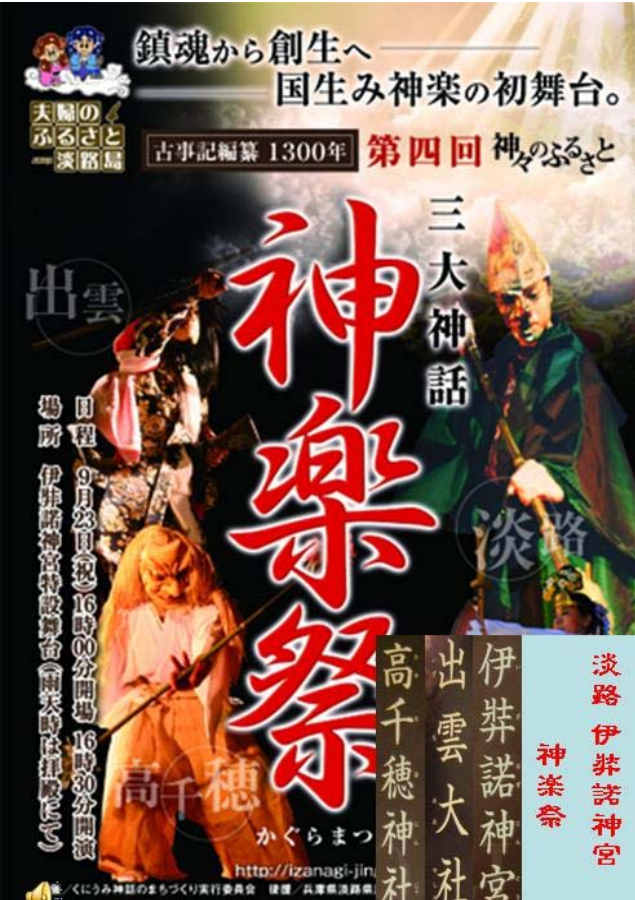
デジカメや断片的な動画で神楽の良さ 伝えられそうにないし、ファイルの容量も膨大になるのですが、とにかく映像記録を作っておこうと。どれだけ、神楽のイメージが伝わるでしょうか???

2011.10.5. 淡路島 伊弉諾神宮 神楽祭の編集を始めて

by Mutsu Nakanishi

[解説] 淡路島 伊弉諾神宮で開催された第四回神楽祭 2011. 9. 23.

淡路 国生み神話・高千穂 天孫降臨・天岩戸の日向神話・出雲 大蛇退治・国譲りの出雲神話
 「三大神話・神々のふるさと」淡路島・高千穂・出雲の神楽舞の競演



鎮魂から創生へ
 国生み神楽の初舞台。
 古事記編纂 1300年 第四回 神々のふるさと
神楽祭
 三大神話
 出雲 高千穂 伊弉諾神宮
 高千穂神社
 出雲大社
 日程 9月23日(祝) 16時00分開場 16時30分開演
 場所 伊弉諾神宮特設舞台(雨天時は拝殿にて)

第四回 神楽祭

古事記や日本書紀などの古記録にある「神代」の伝承を「神話」と呼ぶようになったのは、明治時代以後のことです。全国各地には神代から伝わっている古伝承や逸話がたくさんありますが、淡路島を舞台とする「国生み神話、高千穂への天孫降臨を伝える、日向神話、素戔嗚尊の八岐大蛇退治などの、出雲神話はその中核にあたる三大神話といえます。

国生み伝承の淡路島が誇る最古の神社「伊弉諾神宮」に、高千穂神社と出雲大社から神楽を招いて競演奉納する「神々のふるさと」三大神話「神楽祭」も第四回目を迎えることができました。

「三大神話神々のふるさと」
 国生み神話の淡路島
 天孫降臨を伝える高千穂
 大蛇退治・国譲り伝承の出雲
 この「神々のふるさと」をそれぞれと守ってきた三つの古社があり、それぞれの神話をもとに里人たちが舞い、神々に奉納される神楽が脈々と受け継がれてきた。

- 淡路 巫女神楽と 国生み神楽の創生
- 高千穂神楽
- 出雲 大土地神楽

淡路・出雲・高千穂
 三大神話の郷に伝わる
 神楽の競演
淡路 伊弉諾神宮 神楽祭



淡路島 伊弉諾神宮 神楽祭 2011.9.23.

「三大神話・神々のふるさと」淡路島・高千穂・出雲公演神楽の解説

この「神々のふるさと」には それぞれの地をずっと守ってきた三つの古社があり、それぞれの神話をもとに里人たちが舞い、神々の世界を伝え、神々に奉納する「神楽」舞を脈々と受け継いできた。そんな「三大神話・神々のふるさと」の神楽舞が淡路島 伊弉諾神宮の森で競演する4回目の神楽祭です

第四回 神楽祭

古事記や日本書紀などの古記録にある「神代」の伝承を「神話」と呼ぶようになったのは、明治時代以後のことです。全国各地には神代から伝わっている古伝承や逸話がたくさんありますが、淡路島を舞台とする「国生み神話」・高千穂への天孫降臨を伝える「日向神話」・素戔嗚尊の八岐大蛇退治などの「出雲神話」はその中核にあたる三大神話といえます。

高千穂神社

（鎮座地）
宮崎県西臼杵郡高千穂町大字三田井字敷〇三七番地

（祭神）
高千穂皇神・日向三神
十社大明神・三毛人野命（わか九柱）

（由緒）
天孫降臨神話以下三代神々をお祀りする古社で、承和十年（八四四）五位以下、天安二年（八五八）皇位に上り、日向国では格式の高い神として知られています。
神武天皇の御兄弟神である三毛人野命が高千穂に降られ、神代三代をお祀りしたのを創祀の起源とします。その子孫が長く幸ひ、後に祖先にあたる三毛人野命とその妃神及び御子神を祀りして、十社大明神と称え、更に律世多くの神々を合祀しました。



（鎮座地）
鳥根県出雲市大社町軒榮東九四番地

（祭神）
大國主大神

（由緒）
大國主大神は、天孫降臨神話の神として大國主大神、重羅門大神、大輪主大神、八十矛神、宇摩志國魂神、所遣天下大神、国作之大神など、様々な別名でも敬称されています。
古来三本玉の太玉、國中黒の霊神と記され、一般に神宮といえ、伊弉諾神宮であり、大社といえ、出雲大社の意でもあります。延喜式名神大の中、大社と記し、天日國宮、天日國宮、所遣天下大神宮、大社と記し、柱の寸法、棟柱などの異様がなされ、伝承の正統さが裏証されます。
寛文年間（一六六〇）高き八丈（約二八メートル）の神代なり、現在の本院は享和年間（一八〇〇）の重修によるもので、国に指定されており、本年より凡そ十一年に一度の屋根修葺の奉賛による大修理工が始まりました。
本年十月十日から十日にかけての祭礼は、國譲りの聖地・佐佐木にて全国八百万の神々との地お迎えし、本社東西の十社を所轄、本社を神宮として神が行われます。このように出雲地方では神月（旧十月）に「神在日」と呼んでいます。



伊弉諾神宮

（鎮座地）
兵庫県淡路市多賀七四〇番地

（祭神）
伊弉諾大神 伊弉冉大神

（由緒）
古事記・日本書紀の神代記の書面に国土創造の大神として現れる伊弉諾大神と伊弉冉大神をお祀りする最古の神社で、淡路国三宮、淡路國神、津名明神など、別称され、地名では「いづきん」と尊称されています。
神域は神代の昔、国生みより淡路之國之淡路之國と、現在の淡路島から四國、薩摩、香取、九州、対馬、佐渡、本州と大輪と呼ぶ日本の国土を完成させ、森羅万象を生み、天照大神を祀り、神代神を生み、國を統治の大神を天照大神に祀り、淡路島に降された伊弉諾大神が「國生み」を成し、余生を成した故郷と伝えられ、その神代神話に神が祀りされました。
当時は神を祀り、湯が沸かされ、湯が飲まれましたが、後世に改変により今は神の神池と境内に古池の古池の面影が残っています。
平安時代の延喜式神名には、各社大社と記され、明治維新後は、明治四年國幣社、明治十八年官幣大社と列格し、戦後初めの例として、昭和十九年四月二十二日に、興きあたりより神宮号が宣下され、伊弉諾神宮と改称し、兵庫下郡の地の「神宮」に昇格しました。
現在の社務所は、明治九年（一八七六）からの官費による運営事業で新規に建築されたもので、旧神代時代のものは、二萬五千元（一八八八）の記録を、西門、西門と文化五年（一八〇八）建立の神樂のみです。明治初年の造営では、新本殿に改築のあと、後青の神像を整地してその境内上に本殿を修繕して、神の整備がすすめられました。
一月十五日の御祭、四月二十日の御祭（奉祭）、毎月の建立神楽祭、献灯祭を年間八十八回、御祭が執行されています。



社殿の新築は、第十代孝仁天皇の御代と伝えられ、天武年間（六四六）から大井氏が移住して三田井を興し、十社大明神を興し、神八十八社社殿として興し、神楽しました。
源朝には、山田重忠を代として多くの宝物を奉納し、その重忠が手植えとして伝承され、八百年たつた今も境内に高々と建てられています。文弘安の役では、神像が折壊して折壊し、南北朝の頃には、高千穂皇神が平定を祈願するなどの古記録や宝物が所蔵されています。天正年間には、三田井氏が滅亡して延岡領となり、高千穂、有馬、三浦、牧野、内藤家と旧皇時代の歴代地主はそれぞれ社領地を安堵し、例祭には奉納して神楽の儀をさし、明治維新に至りました。
大正十四年（一九二五）の秩父宮殿下の行幸をはじめ、皇族方が数多く参拝されています。
当地には、天治戸間、天國女命の舞が起源となり、天孫降臨や神代三代の御事蹟を演じた神楽が伝承されて行われ、特に秋の夜神楽は、高千穂の民を氏神を招き寄せ、神楽を奉納する神事として伝えられ、高千穂神社の神楽祭では、高千穂の民が公費を充て、祝儀も同様することをしています。

出雲大社

（鎮座地）
大土土地神楽について

大土土地神楽は、古くは大土土地神楽社として知られており、寛文（一七六一）の「大土土地神楽」の記述があり、その記述から推定されています。大土土地神楽は、古くは「大土土地神楽」として知られており、寛文（一七六一）の「大土土地神楽」の記述があり、その記述から推定されています。大土土地神楽は、古くは「大土土地神楽」として知られており、寛文（一七六一）の「大土土地神楽」の記述があり、その記述から推定されています。

高千穂

（鎮座地）
高千穂夜神楽について

高千穂夜神楽は、古くは「高千穂夜神楽」として知られており、寛文（一七六一）の「高千穂夜神楽」の記述があり、その記述から推定されています。高千穂夜神楽は、古くは「高千穂夜神楽」として知られており、寛文（一七六一）の「高千穂夜神楽」の記述があり、その記述から推定されています。

淡路神楽について

淡路島の神楽は、古くは「淡路神楽」として知られており、寛文（一七六一）の「淡路神楽」の記述があり、その記述から推定されています。淡路神楽は、古くは「淡路神楽」として知られており、寛文（一七六一）の「淡路神楽」の記述があり、その記述から推定されています。

出雲大社

大土土地神楽について

大土土地神楽は、古くは大土土地神楽社として知られており、寛文（一七六一）の「大土土地神楽」の記述があり、その記述から推定されています。大土土地神楽は、古くは「大土土地神楽」として知られており、寛文（一七六一）の「大土土地神楽」の記述があり、その記述から推定されています。

高千穂

高千穂夜神楽について

高千穂夜神楽は、古くは「高千穂夜神楽」として知られており、寛文（一七六一）の「高千穂夜神楽」の記述があり、その記述から推定されています。高千穂夜神楽は、古くは「高千穂夜神楽」として知られており、寛文（一七六一）の「高千穂夜神楽」の記述があり、その記述から推定されています。

1. 淡路神楽 解説



伊弉諾神宮



「伊弉諾（イザナギ）大神、伊弉冉（イザナミ）大神が日本列島の最初に生んだのが淡路島」という国生み神話で知られている最古の神社。淡路國一宮、延喜式名神大社、旧官幣大社。

古事記、日本書紀には、国生みに始まるすべての神功を果たされた伊弉諾大神が、御子神なる天照大御神に国家の統治の大業を委譲され、最初にお生みになられた淡路島の多賀の地に「幽宮」を構えて余生を過ごされたと記されています。その御住居跡に御陵（みささぎ）が営まれ、至貴の聖地として最古の神社が創始されたのが、当神宮の起源です。地元では「いっくさん」と別称され日少宮・淡路島神・多賀明神・津名明神と崇められています。
淡路市ホームページより抜粋

淡路神楽

国生みの地に伝わる「淡路神楽」。

国生み神話の郷 淡路島では島内の神社の祭礼には、小学生の女の子たちが巫女として「神楽」を舞います。

伊弉諾神宮には 現在九曲が伝えられている。 太鼓・締太鼓に龍笛が曲を奏し、巫女が二人ないしは四人で舞う。

現在は「扇鈴の舞」や「御幣の舞」が主で、伊弉諾尊が沼矛で海をかき混ぜて国生みをした神話を基にした「鉾の舞」

などが伝承されている。舞台を「田」の字を描くように歩を進め、同じ所作を繰り返す、非常にシンプルなもの。

古い神楽の素朴な形式を残しているとも言われている。

また、今回の伊弉諾神宮神楽祭にむけ、創生「国生み神楽」が新たに創生され、この神楽祭で 伊弉諾神宮に奉納された。

淡路神楽 鉾の舞

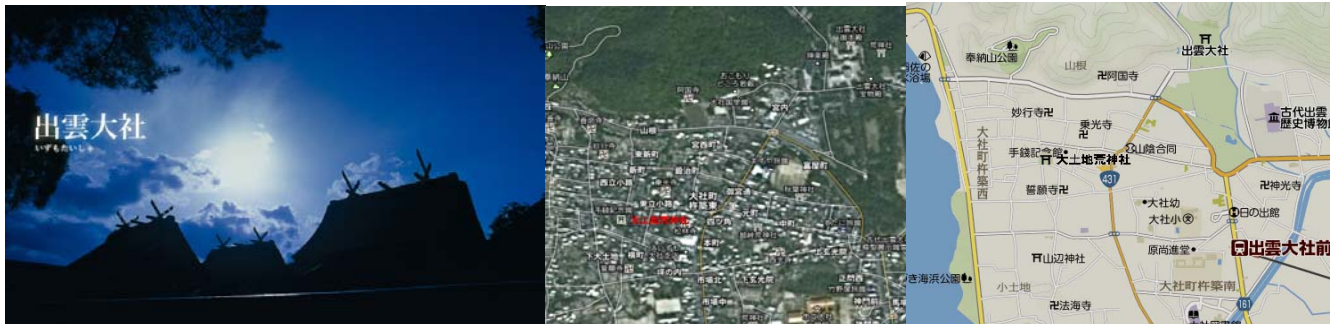
いざなぎ神宮の特別の祭礼の時にのみ舞われる舞。

四人の本職の巫女がそれぞれ鉾を手にして舞う。

イザナギ・イザナミの国生み神話を伝承する場面、鉾で泥海をかき回す所作がみられる。



2. 出雲神楽・大土地神楽 解説



出雲神楽とは民間に伝承される神楽の分類名称。前段の採物舞(とりものまい)と後段の神能(しんのう)の二部分より成る神楽の総称。全国的に広く分布するが、出雲地方に典型がみられるのでこの称がある

大土地(おおどち)神楽は、出雲大社のお膝元・大社町に伝承されている神楽。現在では同保存会神楽方によって10月下旬の大土地荒神社例大祭時を中心に、出雲大社や近郷諸社の祭礼において神楽奉納が行われています。その構成は、基本的には出雲神楽の形式に則り、「七座(しちざ)」と総称される七番の神事的な舞から始まります。そして後段では神が降臨したとして、「荒神(こうじん・国譲り)」や「野見宿禰(のみのすくね)」などの神話劇「神能」が演じられます。(神能 大土地神楽12座ともいわれる)

島根映像ライブラリー「島根の文化・神楽」より (このサイトに説明動画があります)

<http://movie.pref.shimane.jp/culture/kagura.html>



八千矛

この神楽は、大国主大神が、出雲の国を平和にするため活躍された若いころの物語で、その時の名前を八千矛神と言います。また、出雲の国が平和でなく、戦争を繰り返していること、悪事を働いていたのが、八千矛神の兄神である八十神とその子達(子鬼)でした。そこで、この兄神達をこらしめ、人々が安心して暮らせるようにと、八千矛神は弓矢や刀を持って戦われ、ついに八十神は降参して、出雲の国が平和になるまでを描いたものです。



八千矛神の一人舞



八十神(小鬼)の一人舞



八千矛神 VS 小鬼 1)



八千矛神 VS 小鬼 2)



八千矛神 VS 八十神 1)



八千矛神 VS 八十神 2)

インターネット 荒神神楽研究部 淡路島第4回神楽祭 大土地神楽「八千矛」取材記事より 2011.9.23.

<http://blog.zige.jp/orothi/date/2011-09-25.html>

3. 高千穂神楽 解説



◆ 高千穂神社

日本の創世記の様子を物語った。日本神話は「古事記」(712年)、「日本書紀」(720年)、各地の「風土記」などにまとめられています。高千穂町は「日本神話」その伝承地として知られ、天孫降臨の伝承地を古くから守ってきた高千穂神社で、平安時代以来1200年以上の歴史を持つ古社です。この地に数多くある神社の中でも格の高い88の神社を「高千穂八十八社」と言い、その「高千穂八十八社」の総社として信仰を集めてきたのが高千穂神社である。



◆ 高千穂の夜神楽

日本神話(日向神話)伝承の地、高千穂には「天照大神が天岩戸にお隠れになったおり、岩戸の前で、あめのうずめの命が舞ったのが始まり」と伝えられる33番で構成された神楽舞が古くから伝承され、「高千穂の夜神楽」として国の重要無形民俗文化財に指定されている。古くからこの地方の秋の実りへの感謝と翌年の豊穡を祈願し、11月の末から2月上旬にかけて三十三番の夜神楽があちこちの神楽宿で奉納されます。

高千穂神社では 街を訪れる観光客などのため、毎夜 通常 33 番ある高千穂の夜神楽の中から、代表的な天岩戸開きにまつわる 手力雄(タチカラオ)の舞、鈿女(ウズメ)の舞、戸取(とどり)の舞の3番とイザナギノミコトとイザナミノミコトが酒作りをユーモラスに演じる御神躰の舞、以上4番にまとめたコンパクトな観光夜神楽が公演されている

高千穂の夜神楽詳細はインターネット <http://www.pmiyazaki.com/takachiho/kagura.htm>

宮崎観光写真「国指定 高千穂神楽(高千穂の夜神楽) Takachiho no Yokagura」をごらんください。

今回の淡路伊弉諾神宮での神楽祭りでも そんな中から

「手力雄(たちからお)の舞」「鈿女の舞」「戸取(とどり)の舞」「御神躰(ごしんたい)の舞」の4番の舞が奉納されました。

◆ 今回舞われた高千穂夜神楽 4番の概説

インターネット <http://www.pmiyazaki.com/takachiho/kagura.htm> より



「手力雄の舞」



「鈿女の舞」



「戸取の舞」



「御神躰の舞」

インターネット <http://www.pmiyazaki.com/takachiho/kagura.htm> より

◎ 手力雄(たちからお)の舞

手力雄の舞は、手力雄命が天照大神が隠れている天岩戸を探し当てるところをあらわした舞。

鈴と紅白の岩戸幣を持ったこの舞は、静と動の折りが見事に調和した神楽舞いです。

手力雄命が持つ岩戸幣には冠がついています。

青幣の山冠は天と水とを、赤幣の横冠は地と土を表し、分け幣の手では青幣を立て赤幣を肩に当て或いは鈴と一緒に横にして舞われる。ここでは青幣が山、赤幣は畑の象徴と説明される。

しかし、ここでは鎮魂と復活という日神信仰を基調とする岩戸五番のなかの一つとして舞われることから「鈿女（うずめ）」のタマフリに対して幣を用いての天地の祓い神楽として解するのがよりふさわしいように思える。

「柴引」「戸取」「舞い開き」を普通岩戸三番と称し、これに「伊勢」と「鈿女（うずめ）」を加えて岩戸五番という。

「手力雄の舞」は本来伊勢神楽と同一の舞であり、三十三番の数に合わせて後に創案されたものである。

同じ手力雄の舞でも「手力雄」で用いる神面は白面であるのに対して「戸取」で用いる神面は赤面である。

◎ 鈿女（うずめ）の舞

天鈿女命（あめのうずめのみこと）は 天の岩戸の所在がはっきりしたので、岩戸も前で面白おかしく舞い、天照大神を岩戸より誘い出そうとす舞う。この天鈿女命の、天岩戸の前での舞いが、神楽の起源ともいわれます。

微笑みをたたえた女面に三段切りの御幣と日の丸の扇子（おうぎ）を持ち、素襖（すおう）の袖を巻き上げて優雅に舞われるこの舞は男神の力強さを象徴した手力雄命の戸取りとは対象をなす神楽である。

◎ 戸取（ととり）の舞

戸取明神（手力雄命） 天岩戸を開き、天照大神に再び出て頂く。これで又世の中に光が戻る事となる。

赤面に裁着袴、たすきを腰にはさみ杖を持った力強い手力雄の舞い。

「ああら来たり大神殿、なんとて出でさせ給わぬものならば、われ八百万神の神の力を出し一方の戸を取りて投げ捨つれば、伊勢の国は山田ヶ原に着きにけり。また一方の戸を投げ捨つれば、日向国橘の小戸の阿波木原にぞ着きにけり。その時日月さやかに拝まれ給うものなりやあー」と・唱教しながら赤面の汗をはらい黒髪をふり乱し、渾身の力をこめて戸をはらう手力雄の舞は「鈿女（うずめ）」の女性らしい優雅な舞とは対照的な荒々しい力に満ちた男性的な神楽です。

同じ手力雄の舞でも「手力雄」で用いる神面は白面であるのに対して「戸取」で用いる神面は赤面。

これは戸取りという神楽の性格上、渾身の力をこめられるため面（おもて）が紅潮した状態を表しているそうです。

◎ 御神躰（ごしんたい）の舞

伊邪那岐命（イザナギノミコト）と伊邪那美命（イザナミノミコト）二神による国産みの舞といわれるが、本来は新穀感謝祭（新嘗祭）を祝うために男女の神が新穀で酒をつくり、神前に捧げるお神楽で「酒おこしの舞」ともいわれる。神道祭祀では、新穀、神酒を神前に供えて同じものを直会（なおらい）として人々が一緒に戴き、その行為を通して“神人一体”化すると信じられており、それが神楽御神躰のもつ本来の意味であり、男女二神の抱擁として表現されているものである。

男神は裁着袴に面をつけ餅を入れた藁苞（わらづと）を棒にさして担ぎ、右手の扇で棒をリズムカルにたたきながら出て来る。

男神が神庭を一回りすると頬がふくれておちよぼ口の愛敬のある女神が桶とザルをかついて男神に続く。

二人そろって濁酒をこすことになるが、浮気心を出した男神は神楽見物の若い女性のところへ飛び込んで行き大騒ぎとなる。女神につれ戻され再び酒をこす作業がはじまる。

太鼓の調子に合わせてドブコをしばり酒を飲み合ううちに酔った二人は抱き合って夫婦となる。



「手力雄の舞」



「鈿女の舞」



「戸取の舞」



「御神躰の舞」

インターネット <http://www.pmiyazaki.com/takachiho/kagura.htm> より

【整理・引用資料】

1. 淡路島 伊弉諾神宮 第四回神々のふるさと 三大神話 神楽祭 パンフレット
2. インターネット 島根映像ライブラリー「島根の文化・神楽」 <http://movie.pref.shimane.jp/culture/kagura.html>
3. インターネット 宮崎観光写真「国指定高千穂神楽」 Takachiho no Yokagura <http://www.pmiyazaki.com/takachiho/kagura.htm>



神楽祭 スナップ

淡路神楽 鉾の舞	出雲神楽 手力雄の舞(1)
出雲神楽 手力雄の舞(2)	出雲神楽 手力雄の舞(3)
高千穂神楽 鉦女の舞	高千穂神楽 戸取の舞
高千穂神楽 御神躰の舞	

日本神話の残る「神々のふるさと」の神楽

国生み神話の淡路島

淡路神楽

スサノオ・大国主の出雲神話の出雲 出雲 大土地神楽

天孫降臨を伝える日向神話の高千穂 高千穂神楽

淡路・出雲・高千穂 三大神話の郷に伝わる 神楽の競演

淡路 伊弉諾神宮 神楽祭 2011.9.23.

第四回 神楽祭

古事記や日本書紀などの古記録にある「神代」の伝承を「神話」と呼ぶようになったのは、明治時代以後のことです。全国各地には神代から伝わっている古伝承や逸話がたくさんありますが、淡路島を舞台とする「国生み神話」、高千穂への天尊降臨を伝える「日向神話」、素盞鳴尊の八岐大蛇退治などの「出雲神話」はその中核にあたる三大神話といえます。

国生み伝承の淡路島が誇る最古の神社「伊弉諾神宮」に、高千穂神社と出雲大社から神楽を招いて競演奉納する「神々のふるさと」三大神話「神楽祭」も第四回目を迎えることができました。

鎮魂から創生へ
国生み神楽の初舞台。

古事記編纂 1300年 第四回 神々のふるさと



出雲

神楽祭

三大神話



「三大神話神々のふるさと」

国生み神話の淡路島

天孫降臨を伝える高千穂

大蛇退治・国譲り伝承の出雲

この「神々のふるさと」をそれぞれづつと守ってきた三つの古社があり、それぞれの神話をもとに里人たちが舞い、神々に奉納される神楽が脈々と受け継がれてきた。

● 淡路 巫女神楽と

国生み神楽の創生

● 高千穂 神楽

● 出雲 大土地神楽

淡路・出雲・高千穂

三大神話の郷に伝わる

神楽の競演

淡路 伊弉諾神宮

神楽祭

伊弉諾神宮

出雲 大社

高千穂 神社

かぐらまつ

<http://izanagi-jin>

日程 9月23日(祝) 16時00分開場 16時30分開演
場所 伊弉諾神宮特設舞台(雨天時は神楽殿内)

くにふる神話のまちづくり実行委員会 主催 / 兵庫県淡路市



国生み神話の淡路島 伊弉諾神宮



九月二十日 淡路島 伊弉諾神宮
神楽祭

神楽祭



国生み神話の淡路島 伊弉諾神宮



淡路島 伊弉諾神宮 神樂祭 2017.9.23.



鎮魂から創生へ
国生み神楽の初舞台。

古事記編纂 1300年 第四回 神々のふるさと

出雲

三大神話

神樂祭

高千穂 かぐらまつり

日程 9月23日(行)16時00分開場 16時30分開演
場所 伊弉諾神宮特設舞台(雨天時は揮舞にて)

http://izanagi-jingu.jp

主催 くじみ神楽のまちづくり実行委員会 後援 兵庫県淡路市、淡路市、淡路市教育委員会、淡路市職工会

淡路島 伊弉諾神宮 神樂祭 2017.9.23.



淡路神楽



国生みの地に伝わる「淡路神楽」。
 現在九曲が伝えられている舞は、太鼓・締太鼓に龍笛が曲を奏し、巫女が二人ないしは四人で行われる。
 現在は「扇鈴の舞」や「御幣の舞」が主で、伊弉諾尊が沼矛で海をかき混ぜて国生みをした神話を基にした「鉾の舞」などがある。

また、今回 創生 「国生み神楽」がこの神楽祭で初公開された

淡路神楽について

淡路島内の神社の祭礼には、小学校高学年の子女が巫女として、「神楽」を舞います。伊弉諾神宮には現在九曲が伝えられております。古くは十數種の舞がありましたが現在では御幣の舞と扇鈴の舞が主流となっており島内各地の神社の例祭などで奉納されています。太鼓・締太鼓・摺鉦の拍子に龍笛が曲を奏で、巫女が二人又は四人で舞います。江戸時代中期にはすでに神楽が舞われていたという記録も残されています。

舞は舞台に田の字を描くように歩を進め 同じ所作を繰り返して演じます。曲によっては、平拍子と速拍子が併用され、曲の中間で徐々に速拍子に移行し、再び平拍子に戻るものもあります。旋律が近畿地方の各地に傳わる浪速神楽に類似しているのは、後世の改補によるものと考えられます。幕末から明治にかけての頃、奈良の春日大社の巫女神楽を習得した者による影響ともいわれていますが、舞自体は浪速神楽の所作とは異なり、古い淡路神楽の素朴な形式を傳えています。



子供巫女 扇鈴の舞



神宮巫女 鉦の舞





国生みの地に伝わる「淡路神楽」

現在九曲が伝えられている舞は、太鼓・締太鼓に龍笛が曲を奏し、巫女が二人ないしは四人で行われる。

現在は「扇鈴の舞」や「御幣の舞」が主で、伊弉諾尊が沼矛で海をかき混ぜて国生みをした神話を基にした「銚の舞」などがある

その舞は、舞台を「田」の字を描くように歩を進め、同じ所作を繰り返す、非常にシンプルなものである。古い神楽の素朴な形式を残しているとも言われている。



淡路神楽 鉾の舞 2011. 9. 23. 第4回神楽祭で

舞台を「田」の字を描くように歩を進め、同じ所作を繰り返す、非常にシンプルなもの。

古い神楽の素朴な形式を残しているとも言われている。

初公開された
伊弉諾神宮 創生「国生み神楽」



リズムも雰囲気も神楽というより、ミュージカル
淡路の「国生み」神楽になるには
まだまだ 磨かれねば……と



淡路神楽

[End]

出雲大社

いずもたいしゃ



出雲神楽

スサノウ「大蛇退治」や大国主の「国譲り」伝承など

日本神話の郷 出雲

神話を主題とした神楽舞が数多く伝承されている

大土地神祭 2017.9.23.

淡路島 伊弉諾神宮 神祭祭



出雲神楽とは民間に伝承される神楽の分類名称。前段の採物舞(とりものまい)と後段の神能(しんのう)の二部分より成る神楽の総称。全国的に広く分布するが、出雲地方に典型がみられるのでこの称がある

大土地(おおどち)神楽は、

出雲大社のお膝元・大社町に伝承されている出雲神楽。

出雲大社

いづもたいしゃ

現在では同保存会神楽方によって10月下旬の大土地荒神社例大祭時を中心に、出雲大社や近郷諸社の祭礼において神楽奉納が行われています。

その構成は、基本的には出雲神楽の形式に則り、「七座(しちざ)」と総称される七番の神事的な舞から始まります。

そして後段では神が降臨したとして、「荒神(こうじん・国譲り)」や「野見宿禰(のみのすくね)」「八千矛」などの神話劇“神能”が演じられます。

(神能 大土地神楽12座ともいわれる)

大土地神楽



大土地(おおどち)神楽は、出雲大社のお膝元・大社町に伝承されている出雲神楽。

その構成は、基本的には出雲神楽の形式に則り、「七座(しちざ)」と総称される七番の神事的な舞から始まります。そして後段では 神が降臨したとして、「荒神(こうじん・国譲り)」や「野見宿禰(のみのすくね)」「八千矛」などの神話劇“神能”が演じられます。

(神能 大土地神楽12座ともいわれる)



淡路島 伊弉諾神宮 神樂祭 2017.9.23.

大土地神樂 「八千矛」



出雲 大土地神楽「八千矛」 あらすじ

この神楽は、大国主大神が、出雲の国を平和にするため活躍された若いころの物語です。その時の名前を八千矛神と言います。

出雲大社

いづもたいしゃ

まだ、出雲の国が平和でなく、戦争を繰り返している頃、悪事を働いていたのが、八千矛神の兄神である八十神とその子分達(子鬼)でした。

そこで、この兄神達をこらしめ、人々が安心して暮らせるようにと、八千矛神は弓矢や刀を持って戦われ、ついに八十神は降参して、出雲の国が平和になるまでを描いたものです。



国の悪者退治に出向く八千矛の一人舞から 神楽舞が始まりました





八千矛は、悪者の兄神「八十神」の子分の子鬼と戦い、
これを追い出します

八千矛 & 子鬼 戦いの舞



八千矛と子鬼の戦い



八千矛は 次に、親玉の兄神「八十神」と戦い、これを打ち負かします。

八千矛 & 八十神 戦いの舞



八千矛 & 八十神 戦いの舞



悪者がいなくなり、出雲はおだやかな国になり、八千矛が舞う

八千矛の舞



大土地神楽について

大土地神楽は、古くから大土地荒神社の神主によって舞われていましたが、寛政二〇年（七九八）の「とうやじゅんばんちよう栲家順番帳」等の記録によると、その頃から氏子達によって舞われていることが確認でき、三百年以上途絶えることなく受け継がれています。

その舞い振りや奏楽は、毎年二〇月の荒神社例祭で、昔ながらの形で受け継がれ現在に至っており、石見神楽や他の出雲神楽には見られない素朴な特徴があり、囃子についても独特です。また能舞の要素が多分に含まれた舞いも残っており、腰に「まくら」を背負った上に衣装を着けるといった、独特な容姿となっています。昭和六〇年四月「島根県無形民俗文化財」に、平成十七年二月には国の「重要無形民俗文化財」に指定されております。

現在の活動としては、大土地荒神社例祭はもとより、出雲大社例祭への奉納神楽、県内外での公演もしています。近年では平成四年にアメリカ・ポートルランドやエリンスバーグ、平成五年には、フランスの「パリ日本文化祭」やイギリス・ロンドンでの公演といった好機に恵まれ、国外でも神楽を披露することが出来ました。また、稲佐の浜夕刻篝火舞等、他の神楽団体と企画したイベント開催もしています。



出雲大社



出雲大社

いづもたいしゃ

出雲神楽

[End]



淡路島 伊弉諾神宮 神楽祭 2011.9.23.





高千穂神社

日本の創世記の様子を物語った日本神話は「古事記」（712年）、「日本書紀」（720年）、各地の「風土記」などにまとめられています。

「日本神話」その伝承地として知られ、天孫降臨の伝承地を古くから守ってきたのが高千穂神社。

平安時代以来1200年以上の歴史を持つ古社です。この地に数多くある神社の中でも格の高い88の神社を「高千穂八十八社」と言い、その「高千穂八十八社」の総社として信仰を集めてきたのが高千穂神社である。



日本神話(日向神話)伝承の地、高千穂には「天照大神が天岩戸にお隠れになったおり、岩戸の前で、あめのうずめの命が舞ったのが始まり」と伝えられる33番で構成された神楽舞が古くから伝承され、「高千穂の夜神楽」として国の重要無形民俗文化財に指定されている。古くからこの地方の秋の実りへの感謝と翌年の豊穡を祈願し、11月の末から2月上旬にかけて三十三番の夜神楽があちこちの神楽宿で奉納されます。

高千穂神社では 街を訪れる観光客などのため、毎夜 通常33番ある高千穂の夜神楽の中から、代表的な天岩戸開きにまつわる 手力雄(タヂカラオ)の舞、鈿女(ウズメ)の舞、戸取(とどり)の舞の3番とイザナギノミコトとイザナミノミコトが酒作りをユーモラスに演じる御神躰の舞、以上4番にまとめたコンパクトな観光夜神楽が公演されている

今回の淡路伊弉諾神宮での神楽祭りでも そんな中から「手力雄(たちからお)の舞」「鈿女の舞」「戸取(とどり)の舞」「御神躰(ごしんたい)の舞」の4番の舞が奉納されました。

高千穂神楽



「手力雄の舞」

「鈿女の舞」

「戸取の舞」

「御神躰の舞」

インターネット <http://www.pmiyazaki.com/takachiho/kagura.htm>より



◎ 手力雄たちからおの舞

手力雄の舞は、手力雄命が天照大神が隠れている天岩戸を探し当てるところをあらわした舞。

鈴と紅白の岩戸幣を持ったこの舞は、静と動の折れ合いが見事に調和した神楽舞いです。手力雄命が持つ岩戸幣には冠がついています。

青幣の山冠は天と水とを、赤幣の横冠は地と土を表し、分け幣の手では青幣を立て赤幣を肩に当てて或いは鈴を一緒に横にして舞われる。ここでは青幣が山、赤幣は畑の象徴と説明される。

しかし、ここで雄魂と復活という日神信仰を基調とする岩戸五番のなかの一つとして舞われることから「細女(うずめ)」のタマフリに対して幣を用いての天地の祓い神楽として解するのがよりふさわしいように思える。

「紫躬」「戸取」「舞い開き」を普通岩戸三番と称し、これに「伊勢」と「細女(うずめ)」を加えて岩戸五番という。「手力雄の舞」は本来伊勢神楽と同一の舞であり、三十三番の数に合わせて後に創案されたものである。同じ手力雄の舞でも「手力雄」で用いる神面は白面であるのに対して「戸取」で用いる神面は赤面である。



◎ 細女(うずめ)の舞

天細女命(あめのうずめのみこと)は天の岩戸の所在がまぎりしたので、岩戸も前で面白おかしく舞い、天照大神を岩戸より誘い出そうとして舞う。

この天細女命の、天岩戸の前での舞いが、神楽の起源ともいわれます。

微笑みをたたえた女面に三段切りの御幣と日の丸の扇子(おうぎ)を持ち、素襦(すおう)の袖を巻き上げて優雅に舞われるこの舞は男神の力強さを象徴した手力雄命の戸取りとは対象をなす神楽である。



◎ 戸取(とりの)の舞

戸取明神(手力雄命)が天岩戸を開き、天照大神に再び出て行く。これで又世の中に光が戻る事となる。

赤面に裁着袴、たすきを腰にはさみ杖を持った力強い手力雄の舞い。「ああら来たり大神殿、なんて出でさせ給わぬものならば、われ八百万神の神の力を出し一方の戸を取りて投げ付ければ、伊勢の国は山田ヶ原に着きこなり。また一方の戸を投げ付ければ、日向国橋の小戸の阿波木原にぞ着きこなり。その時日月さやかに拝まれ給ものなりやあー」

唱歌しながら赤面の汗をほらい黒髪をふり乱し、渾身の力をこめて戸をはらう手力雄の舞は「細女(うずめ)」の女性らしい優雅な舞とは対照的な荒々しい力に満ちた男性的な神楽です。

同じ手力雄の舞でも「手力雄」で用いる神面は白面であるのに対して「戸取」で用いる神面は赤面。これは戸取りという神楽の性格上、渾身の力をこめられるため面(おもて)が紅潮した状態を表しているそうです。



◎ 御神楽(ごんたい)の舞

伊弉册(みこと)命と伊弉册(みこと)美命 二神による国産みの舞といわれるが、本来は新穀感謝祭(新嘗祭:こいなめさい)を祝うために男女の神が新穀で酒をつくり、神前に捧げるお神楽で「酒おこしの舞」ともいわれる。

神道祭祀では、新穀、神酒を神前に供えて同じものを直会(なおらい)として人々が一緒に戴ぎ、その行為を通して“神人一体”化すると信じられており、それが神楽御神楽のもつ本来の意味であり、男女二神の抱擁として表現されているものである。

男神は裁着袴に面をつけ餅を入れた葉苞を棒にさして担ぎ、右手の扇で棒をリズムカルにたたきながら出て来る。男神が神庭を一回りすると愛敬のある女神が桶とザルをかついで男神に続く。二人そろって濁酒をこすことになるが、浮気心を出した男神は神楽見物の若い女性のところへ飛び込んで行き大騒ぎとなる。女神につれ戻され再び酒をこす作業がはじまる。太鼓の調子に合わせてドブコクをしまり酒を飲み合ううちに酔った二人は抱き合って夫婦となる。



淡路島 伊弉諾神宮 神楽祭 2011.9.23.

高千穂神楽

「手力雄の舞」

「戸取の舞」

「鈿女の舞」

「御神跡の舞」

高千穂神楽 「手刀雄 たじからお の 舞」



淡路島 伊弉諾神宮 神楽祭で 2011.9.23.夕

高千穂神楽 「手力雄 たじからお の 舞」 あらすじ

手力雄の舞は、手力雄命が天照大神が隠れている天岩戸を探し当てるところをあらわした舞。

鈴と紅白の岩戸幣を持ったこの舞は、静と動の折り合いが見事に調和した神楽舞いです。

手力雄命が持つ岩戸幣には冠がついています。

青幣の山冠は天と水とを、赤幣の横冠は地と土を表し、分け幣の手では青幣を立て赤幣を肩に当て或いは鈴と一緒に横にして舞われる。

青幣が山、赤幣は畑の象徴と説明される

「柴引」「戸取」「舞い開き」を普通岩戸三番と称し、これに「伊勢」と「鈿女（うずめ）」を加えて岩戸五番という。

「手力雄の舞」は本来伊勢神楽と同一の舞であり、三十三番の数に合わせて後に創案されたもの。

同じ手力雄の舞でも「手力雄」で用いる神面は白面であるのに対して「戸取」で用いる神面は赤面である。



手力雄が天照大神を探しに行くところから神楽舞が始まり
天照大神の隠れておられるところを見つけます



天照大神を探す「手刀雄 たじからおの舞」 (天岩戸の前の部分)

高千穂神楽

鈿女うずめの舞



天岩戸の前で岩戸の前で面白おかしく舞う天鈿女命

高千穂神楽 「鈿女 うずめ の 舞」 あらすじ

天鈿女命（あめのうずめのみこと）は 天の岩戸の所在がはっきりしたので、岩戸の前で面白おかしく舞い、天照大神を岩戸より誘い出そうとす舞う。この天鈿女命の、天岩戸の前での舞いが、神楽の起源ともいわれます。

微笑みをたたえた女面に三段切りの御幣と日の丸の扇子（おうぎ）を持ち、素襖（すおう）の袖を巻き上げて優雅に舞われるこの舞は男神の力強さを象徴した手力雄命の戸取りとは対象をなす神楽である。



天岩戸の前で岩戸の前で面白おかしく舞う天鈿女命

鈿女 うずめの舞



鈿女 うずめの舞 岩戸の前で面白おかしく舞う (部分)

高千穂神楽「戸取りの舞」



高千穂神楽 「戸取りの舞」 あらすじ

戸取明神（手力雄命） 天岩戸を開き、天照大神に再び出ていただく。
これで又世の中に光が戻る事となる。

赤面に裁着袴、たすきを腰にはさみ杖を持った力強い手力雄の舞い。

「ああら来たり大神殿、なんとて出でさせ給わぬものならば、
われ八百万神の神の力を出し一方の戸を取りて投げ捨つれば、
伊勢の国は山田ヶ原に着きにけり。
また一方の戸を投げ捨つれば、日向国橘の小戸の阿波木原に
ぞ着きにけり。その時日月さやかに拜まれ給うものなり
やあー」

唱教しながら赤面の汗をはらい黒髪をふり乱し、渾身の力をこめて戸をはらう手力雄の舞は「鈿女（うずめ）」の女性らしい優雅な舞とは対照的な荒々しい力に満ちた男性的な神楽です。

同じ手力雄の舞でも「手力雄」で用いる神面は白面であるのに対して「戸取」で用いる神面は赤面。これは戸取りという神楽の性格上、渾身の力をこめられるため面（おもて）が紅潮した状態を表しているそうです。



天岩戸の前で舞う手力雄



いよいよ天岩戸を開けにかかる



開いた岩戸を高々ともちあげる



開いた岩戸を高々ともちあげ、舞う手刀雄

高千穂神楽「御神躰の舞」



伊邪那岐と伊邪那美がでてきて、
酒をつくりをはじめるところから 舞が始まる

高千穂神楽「御神躰の舞」 酒造りを始めるイザナギとイザナミ



高千穂神楽「御神躰の舞」 あらすじ

伊邪那岐命と伊邪那美命二神による国産みの舞。

本来は新穀感謝祭（新嘗祭）を祝うために男女の神が新穀で酒をつくり、神前に捧げるお神楽で「酒おこしの舞」ともいわれる。

神道祭祀では、新穀、神酒を神前に供えて同じものを直会（なおらい）として人々が一緒に戴き、その行為を通して 神人一体化すると信じられており、それが神楽御神躰のもつ本来の意味であり、男女二神の抱擁として表現されているものである。

男神は裁着袴に面をつけ餅を入れた藁笥（わらづと）を棒にさして担ぎ、右手の扇で棒をリズムカルにたたきながら出て来る。

男神が神庭を一回りすると愛敬のある女神が桶とザルをかついで男神に続く。

二人そろって濁酒をこすことになるが、浮気心を出した男神は神楽見物の若い女性のところへ飛び込んで行き大騒ぎとなる。

女神につれ戻され再び酒をこす作業がはじまる。

太鼓の調子に合わせてドブロクをしぼり酒を飲み合ううちに酔った二人は抱き合って夫婦となる。



ふたりで酒づくり



観客にちょっかいを出しに行くイザナギ





戻って また ふたりで酒づくり



造った酒を なかよく 飲みかわす



造った酒を飲みかわす 穏やかな空間



酔っ払って 寝てしまおうイザナギ イザナミは道具を片付ける



平々凡々 踊りながら 二人は退場する



お祭りの舞

お祭りの舞

高千穂



高千穂の夜神楽について

高千穂地方に伝承されております神楽は、天照大神が天岩戸に隠られた折に岩戸の前あまのつちのりかじとで天鈿女命が調子面白く舞ったのが始まりとされておりまして古来私共の祖先は、永い間、高千穂宮を中心に、この神楽を伝承して今日に及んでおります。

昭和五三年に国の重要無形民俗文化財の指定を受け、昭和五五年にはヨーロッパで開催された国際伝統芸術祭に招待を受けるなど、全国各地で多くの公演を行っております。その伝承は遠く、神楽研究家の間では、平安末期から鎌倉時代にかけて成立したと言われております。高千穂の夜神楽は、毎年十二月の末から翌年の二月にかけて町内各地区にて三三番の夜神楽を夜を徹して奉納し、秋の実りに対する感謝と翌年の豊饒を祈願するものであります。

本日は、その中より、「手力雄の舞」、「鈿女の舞」、「戸取の舞」、「御神林の舞」の四番の舞を公開いたします。



高千穂神楽

「手力雄の舞」

「戸取の舞」

「鉦女の舞」

「御神跡の舞」

[end]



淡路島 伊弉諾神宮 神楽祭 2011.9.23.

